



自分らしく 生きる

～新しい認知症観と地域とのつながり～

全国的に高齢化が進み、認知症の方の人数が増加するとともに、認知症に対する考え方も変化し、「新しい認知症観」が普及しています。

市では、「新しい認知症観」で重要なポイントでもある「地域とのつながり」を大切にする「オレンジカフェ」などの取り組みを行っています。これらの活動を通じて、認知症の方一人一人が自分らしく暮らし続けられるまちづくりに努めていきます。

今回は62歳で若年性認知症と診断された市内在住のAさんに生活の様子や思いなどを聞きました。

☎ 高齢福祉課 ☎ 内線1308

3.6人に1人が認知機能に症状が…

「認知症」とは、脳の神経細胞の働きの変化によって、記憶や判断力などに影響が現れ、暮らしの中で工夫や周囲の支援が必要になることがある状態をいいます。現在、高齢化が進むにつれ認知症の方が増加しています。令和4年度の調査では、65歳以上の高齢者3,627万人のうち認知症の高齢者数は約443万人、認知症の前段階と考えられている軽度認知障害(MCI)の高齢者数は約559万人で、合計1,000万人以上となり、3.6人に1人が認知機能に症状がある状況です。

参考：厚生労働省「認知症施策推進基本計画」、総務省統計局「統計からみた我が国の高齢者」

新しい認知症観

「新しい認知症観」とは、認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間などとつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができるという考え方です。

令和6年1月には、認知症の方を含む国民一人一人が個性と能力を十分に発揮し、お互いに人格と個性を尊重し、支え合いながら共生する活力ある社会を目指すため、認知症基本法が施行されました。この認知症基本法を基に策定した計画では、「新しい認知症観に立って施策を推進する」と明記されています。

参考：厚生労働省「認知症施策推進基本計画」

変化する認知症の考え方

これまでの認知症のイメージ



本人

- 今までできなかった
- 自分の思いや考えを伝えられない



家族

- 生活の全てに支援が必要



地域

- 地域の方々と関わりながら暮らし続けることが難しい

新しい認知症観

- できること、分ることが豊富にある
- 自分の言葉や行動で伝えられる

- やりたいことをできるようサポートする
- できることは自分でやってもらう

- 地域の一員として、活躍しながら暮らすことができる

参考：認知症介護研究・研修センター
「令和7年度認知症地域支援推進員研修資料」

新しい認知症観をふまえた市の取り組み

市では、新しい認知症観と共に、一人一人が希望を持って自分らしく暮らし続けるための取り組みを進めています。



本人の声を大切にする



社会参加できる環境づくり



正しい理解を広げる



地域で見守り
支え合う仕組みづくり



本人や家族が
相談しやすい体制の充実

ホーム
ページ

